

徳川みらい学会第6回講演会

「浜松で世に出た家康と秀吉」

静岡文化芸術大学准教授 磯田道史氏



徳川みらい学会の第6回講演会を2月14日(金)、静岡市民文化会館で開催しました。講師は静岡文化芸術大学准教授の磯田道史氏。静岡県を舞台にした家康と秀吉の当時の様子を主に語っていただきました。

要旨は次のとおりです。

家康のライバルは 信玄と秀吉

家康にとって脅威に感じていた大名は武田信玄と豊臣秀吉でした。家康と秀吉はともに浜松で交差しています。秀吉の無名時代を伝えるものも確かな史料は『太閤素生記』とされていますが、15歳の時に頭陀寺城(現浜松市)の城主松下氏に見出され、引間城に仕官し、3年間仕えました。その約20年後、引間城に居を移してきた家康は、引間城を拡張して浜松城とし、武田信玄との

対決に備えました。

武田信玄との 三方ヶ原の戦い

家康が浜松城に居城し、三方ヶ原の戦いに備えた頃、徳川領は徐々に武田領に圧迫され、命の危険を感じるようになりました。

そんな中で、信玄に戦いを挑み負けてしまう訳ですが、『織田軍記』に書かれているように、通説では武田軍2万8千人に対し、徳川軍8千人、織田軍3千人の戦でした。しかし、『織田軍記』よりも古い資料『甲陽軍艦』や『前橋酒井家旧蔵聞書』を元に推測すると、織田軍の援軍は実は3千人ではなくて、2万人だったとされています。この2万人が岡崎から白須賀、浜松にかけて分散配置されて、三方ヶ原の戦いまで来た援軍は存外少なかったのだろうと思います。戦で負けた場合、その

まま城まで追撃を受けて滅びることが多いのですが、この戦では、信玄は浜松城を包囲しませんでした。浜松城を落とすとすると30日は要するので、その間に援軍がやってくるかと考えて信玄は落城を諦めました。

豊臣秀吉との 長久手の戦い

次に秀吉との戦いです。小牧長久手の戦いは局地的には家康が勝利しますが、その後秀吉は伊賀や伊勢、尾張西部を侵攻、占領しています。そのままの勢いで家康討伐の準備をしていた矢先、震度7と言われる天正地震が発生しました。天守閣が倒壊する程の地震で、領内の前線基地が一夜にして全て崩壊してしまいました。これが家康にとっては命拾いとなったのです。



家康公が天下を取れたのは、勇敢で実力があつたことはもちろんですが、やはり運も持ち合わせていたのでしょう。また、出口戦略もしっかりしていました。負けたらどうなるのか、上手いかなかつた時の代替案、柔軟性を持った戦略を立てることができたからです。



個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈問い合わせ〉徳川みらい学会事務局 (TEL) 284-9660 (HP) [徳川みらい学会](#) [検索](#)